

発表されて、第十回と第十一回の直木賞最終候補となり、惜しくも賞は逸したものの、昭和十七年、文学座により初演され、翌十八年には、伊丹万作脚色・稲垣浩監督、阪東妻三郎・園井恵子主演の映画「無法松の一生」として大映より上映され大ヒットして行くのである。

岩下俊作は、「九州文学」に江戸時代の算法家の師弟愛を描いた「算額問答」や、長編「西域記」を七年間十三回にわたって断続連載したほか、「大衆文芸」に、対馬通いの船頭の心意気を生きたりと描写した「対州まだらの唄」を発表、製鉄所に働く自らの体験をこめた「青春の流域」を書き下ろし刊行するなど、九州の風土と労働の姿を力強く描いた。

戦後は、全国に先駆けて志摩海夫とともに詩誌「浪漫」を創刊、社会風刺の詩を書く一方、八幡製鐵創作研究会を作つて、後進の指導にあたり、晩年には、青木新六と詩誌「たむたむ」を創刊するなど、若い人たちへ発表の場を作った。

昭和三十三年に東宝が再映画化した三船敏郎主演の「無法松の一生」が、第十九回ベニス国際映画祭でグランプリを受け、大きな話題となり、イタリアのモンダド

ーリ社「無法松の一生」のイタリア語版「L'OMO DEL RIKSCIO」が出版された。これはイタリアにおける近代日本文学の紹介のトッパを切つての出版であつた。

また、舞台と映画でそれぞれ初演した丸山定夫・園井恵子が「苦楽座」でも「無法松の一生」を演じて戦時下の各地を巡回、広島原爆に被爆した事も、いたましい事であつた。

そして、この映画が戦時中と戦後の検閲によつて、二度もカットされた事から、その復元朗読による白井佳夫のパフォーマンスが続けられた。宝塚歌劇団によるミュージカル化など、原作が誕生して六十数年を経た今も、各方面に愛され、「無法松の一生」は、今や、国民的遺産となつた感があるが、今日のシルクロードブームの六十年数年前に、戦時の言論統制の下で、黙々と西域への思いに文学の営為をかけた岩下俊作の「西域記」は、もつと再評価され、研究されてよいのではないだろうか。

平成九年、遺族の熱意により北九州都市協会から刊行された「岩下俊作選集」全五巻が、岩下俊作が開拓した真の大衆文学の清々しい全貌を垣間見せてくれる。

柏木恵美子

劉寒吉

劉寒吉の小説家としての本領は、市井ものの作品に見られる。劉が私淑した小説家の宇野浩二も「劉さんの作品では短編集「世間ばなし」がいいです」と賞揚した。表題作のほか「靴」「三寒四温」「翁」などの九編が収録されているが、いずれも題材を市井にとり抑制のきいた手堅いリアリズム手法による作品である。

郷土小倉に材をとつた小説に、小笠原騷動の「紫川の霧」「脱藩惣勢三百五十八人」、長州戦争のとき的小笠原家老島村志津摩にせま「山河の賊」、昭和初期の北九州港町での市議選の人間模様の「人間競争」、蓮門教をえがいた「神の火」、教育者杉山貞の生涯をつづる「以呂波読本」などがある。

後年、歴史小説を手掛けたが、九州をこよなく愛する劉は、九州の武将をえがき、「天草四郎」「黒田騷動」「竜造寺党戦記」大友宗麟の「西国の獅子」、それに俳人種田山頭火をしのぶ「旅の火」、歌人宗不早をえがいた「阿蘇外輪山」などの長・短編がある。

また、劉寒吉はすぐれた現実主義者であつた。

「九州文学」の創刊から休刊までの四十五年の間、劉が同誌の大黒柱として重責を果たし得たの

は、深い洞察力、強い統帥力、温かい指導力によるものであつた。「九州文学」誌が発行上の危機に陥ると、すすんでこれを救い、同人の作品発表の場だけでなく、新人発掘のための場としても提供した。同人たちの単行本に題字や跋文を書き、九州各地で開かれる出版記念会に出席して、その意義を讃えた。

その一方で、旧小倉市時代から工業地帯の北九州が文化の沙漠と呼ばれることを歎き、北九州市が発足すると、文化施設の建設委員長になり、森鷗外旧居の保存に熱意を燃やし、復元が完成すると北九州森鷗外記念会の会長に就任した。

そのほか、北九州文化財展覧会実行委員長、北九州の文化財を守る会の常任理事、小倉南区頂吉地区の民俗調査団の本部長となつて「頂吉民俗調査報告書」を刊行、また市立郷土資料館運営委員長をつとめた。

さらに、柳川の生んだ詩人で、劉が師と仰ぐ北原白秋の生家保存など、地域に根ざした文化活動にも貢献した。

九州の菊池寛と評される所以である。

七十一歳のとき、「西日本における文学活動と地域文化の推進

に尽くした功績」により西日本新聞社から第三十六回西日本文化賞を受賞した。

書は独特の風格を持ち、興がわくと自作の短歌や俳句を色紙に書き、「九州文学」同人の単行本の題字に使われ、石碑などにも揮毫した。また、よく推敲された短文の名手で、文学碑に見られる。

「小説は自身との戦いである」と強調していたが、晩年は多忙のために「世のため人のため」の廃業を宣言しても、頼まれては断られず、その自由はついに与えられなかった。

強度の近視で、丸ぶちの眼鏡に渦巻くレンズがトレードマークであつたが、その奥にひそむ瞳は象の目のようにやさしく、いつも片すみの椅子を愛する人柄は、彼を知る人びとから、おもてでは「劉先生」と尊敬され、うらでは「劉さん」と呼ばれて、慕われ続けた。

田中九州男

